

前近代東アジアにおける

〈術数文化〉

序……………水口幹記…4

総論——〈術数文化〉という用語の可能性について……………水口幹記…8

I……………〈術数文化〉の形成・伝播

人日と臘日——年中行事の術数学的考察……………武田時昌…26

堪輿占考……………名和敏光…43

味と香……………清水浩子…52

郭璞『易洞林』と干宝『搜神記』——東晋はじめ、怪異記述のゆくえ……………佐野誠子…65

白居易新樂府「井底引銀瓶 止淫奔也」に詠われる「瓶沈簪折」について

——唐詩に垣間見える術数文化……………山崎藍…78

引用書から見た『天地瑞祥志』の特徴

——『開元占経』及び『稽瑞』所引の『漢書』注釈との比較から……………洲脇武志…90

宋『乾象新書』始末……………田中良明…101

獸頭の吉鳳「吉利・富貴」について——日中韓の祥瑞情報を手がかりに……松浦史子…111
三善清行「革命勘文」に見られる緯学思想と七〜九世紀の東アジア政治……孫英剛…126

II 〈術数文化〉の伝播・展開

ベトナムにおける祥瑞文化の伝播と展開

——李朝（一〇〇九〜一二二五）の靈獸世界を中心にして……ファム・レ・フイ…143

漢喃研究院に所蔵される

ベトナム漢喃堪輿（風水）資料の紹介……チン・カック・マイン／グエン・クオック・カイン…168

漢喃暦法の文献における二十八宿に関する概要……グエン・コン・ヴィエット…192

ベトナム阮朝における天文五行占の受容と禁書政策……佐々木聡…201

『越甸幽霊集録』における神との交流……佐野愛子…216

「新羅海賊」と神・仏への祈り……鄭淳一…228

『観象玩占』にみる東アジアの術数文化……高橋あゆの…250

日本古代の呪符文化……山下克明…260

平安時代における後産と医術／呪術……深澤瞳…281

江戸初期の寺社建築空間における説話画の展開

——西本願寺御影堂の墓股彫刻「二十四孝図」を中心に……宇野瑞木…292

序

水口幹記

「術数」（「数術」ともいう）とは、天文学・数学・地理学など自然科学分野と、易を中心とした占術が複雑に絡み合った古代中国で成立した思想・学問である。そのため術数に関する研究は、科学と占術という二つの側面を持つ。

日本では、その初期においては、科学的側面、特に天文学や暦学に関心が集まったが（新城新蔵・藪内清など）、その背景的思想を理解しようとする中で、伝統的な『易』の思想を根幹とした占術的側面への関心も高まることとなった。

ただし、占術面の本格的な研究が始まるのは、一九六〇年代以降である。まず安居香山や中村璋八らは、漢代儒学の神秘的側面に着目し、緯書や讖緯などの予言的言説を明らかにしたことで（『緯書集成』漢魏文化研究室、一九五九〜六四年「後『重修緯書集成』明德出版、一九七二〜九二年」、安居編『讖緯思想の総合的研究』国書刊行会、一九八四年）、占術が思想史における重要テーマとして定着した。一方で、先の藪内らの薫陶を受けた山田慶児や坂出祥伸らは、天文観念や医術養生思想を研究する上で、占術と科学の両面による研究方法を確立した（坂出

『中国古代の占法』研文出版、一九九一年。山田『中国医学の起源』岩波書店、一九九九年など。

また、中村は中国のみならず日本でも古くから利用されていた術数の基本書である『五行大義』の注釈書（中村『五行大義校註 増訂版』汲古書院、一九八四年。中村『新編漢文選 五行大義』明治書院、一九九八年）を出す一方、『日本陰陽道書の研究』（汲古書院、一九八五年）により、日本の陰陽道と中国の術数文化との関係を鋭く指摘し、術数文化の東アジア的展開研究の先鞭をつけた。

こうした流れを受け、近年では、武田時昌が術数を陰陽・五行理論を中心とする学問という広い枠組みで捉え直し、術数学の総合的研究グループを組織し、多様な成果を上げ（武田編『陰陽五行のサイエンス』京都大学人文科学研究所、二〇一一年、武田編『術数学の射程——東アジア世界の「知」の伝統』京都大学人文科学研究所、二〇一四年）、三浦國雄は術数を、呪術を含めた「術」（技術）として捉え、思想史研究者を中心とする共同研究班を組織し、占術書としての『易』を始め、風水・日選び・人相・手相・暦など様々な実用的な術数文献の整理を行っている（三浦編『術数書の基礎的文獻学的研究——主要術数文献解題』正編二〇〇七年、続編二〇〇九年、三編二〇一二年、科研報告書）。また、川原秀城が、術数学とは広義の「数」の学術のことであると規定し、優れた成果を世に送り出すなど（『数と易の中国思想史——術数学とは何か』勉強出版、二〇一八年）、現在は、若手を含む多くの研究者により幅広く議論がなされ、アジア学全体における関心も高まりつつある。

本書は、このような状況を踏まえ、東アジアにおける術数研究をより一層進展させることを目指し企図されたものである。そもそも術数は、前近代を通じて東アジアの諸地域・諸国に広く伝播し、それぞれの社会に深く浸透していくことで、それぞれの文化の形成・発展にも強い影響を与えたものであり、術数文化を捉えるためには、科学的な側面だけではなく、社会生活上の様々な側面に着目する必要がある。そこで、私たちは幅広い文化的現象を統合する用語として〈術数文化〉というキーワードを設定した。私たちは、〈術数文化〉を掲げることに、これまでの術数研究では看過されがちであった理論・思想以外の事象（文学・学術・建築物・絵画などへの影響や受容）をも正面から対象とすることができ、また、本用語の下、諸地域・諸国への伝播・展

開の様相を通時的に検討することにより、各諸地域・諸国の独自性・特質を析出することが可能となると考えた。

そして、本書編纂の母体となったのが、「前近代東アジアにおける術数文化の形成と伝播・展開に関する学際的研究」という課題名（代表者・水口。課題番号：1610346）で取得した科学研究費に基づく共同研究班での検討である（本書はその成果報告書の側面も有している）。

研究班では、「術数文化」という用語の概念規定および学界への提唱を目指すとともに、

(1) 〈術数文化〉と書物（特に類書形式の術数文献）との関係

(2) 〈術数文化〉と出土資料・美術建築物との関係

(3) 海外における〈術数文化〉研究の検討・紹介

の三点を具体的検討テーマとして掲げ、共同研究の場で前近代東アジアにおける〈術数文化〉について議論を重ねてきた。この三点を設定した理由について簡単に説明しておこう。

(1) 設定の理由は、まず〈術数文化〉の東アジアの国々への広がりにおいて重要な役割を果たしたのは術数文献であるという認識にある。いずれの文化伝播においても言えることではあるが、書物の果たした役割は大きく、それは〈術数文化〉も例外ではない。そして、中でも主要な術数文献には類書形式で書かれたものが多く、注目される。類書形式の術数文献は、祥瑞・災異・天文・暦・陰陽五行・占術・鬼神・呪符など内容が多岐に渡り、分野の広がりは大い。しかし一方で、類書形式の術数文献に関する研究は思いの外乏しいという現状がある。私たちが着目するのは、様々な社会や生活文化に深く浸透してきた伝統文化としての術数である。このことを踏まえれば、伝統的な百科全書であり、また天地の全てを網羅する類書という形式こそ、術数が多様な文化として広く浸透する上で重要な役割を果たした可能性が高く、具体的な検討に値すると判断したからである。

(2) 設定の理由は、伝世文献のみならず、出土資料や敦煌文書、また、キトラ古墳の天文図に代表されるように美術・モニュメント・建築・壁画としての資料も重要な意味を持つという認識に基づいている。そうし

た美術・意匠は、各国おける都城の形成（たとえば、ベトナムでは都城に瑞獸などの意匠が施されており、李氏朝鮮では都城や墓地選定に風水が強く関与していた）においても重要な役割を果たしている。この点を踏まえ、私たちは伝世文献の文字資料以外における〈術数文化〉の影響について明らかにしていく必要性があると考えたからである。

(3) 設定の理由は、近年は海外でも〈術数文化〉と関わる研究が盛んであるが、これらの研究、特に中国以外の研究が日本に紹介されることはあまりないという、至つてシンプルなものである。しかし、こうした紹介が増えていけば、諸地域・諸国の〈術数文化〉に対する理解は間違いなく深まっていくと思われる（本書以外でも、名和敏光編『東アジア思想・文化の基層構造——術数と『天地瑞祥志』』汲古書院、二〇一九年に、本研究班の成果としての海外翻訳論文を複数収載している）。

以上の方向性・諸点を踏まえ、〈術数文化〉を軸に構成された本書は、冒頭の総論で、キータームである〈術数文化〉という用語の可能性について水口が論じ、以下、全体を二部に分けた。第一部を「〈術数文化〉の形成・伝播」として、中国に関する論考を中心に配し、第二部を「〈術数文化〉の伝播・展開」とし、中国以外の東アジア地域に関する論考を配している。特に第二部では、これまであまり日本では紹介されることのないベトナムの術数に関する論考を複数収載することができたことは、大きな収穫であるといえよう。

研究は緒についたばかりである。しかし、本書の取り組みを今後も推進していくことにより、中国中心の術数研究から東アジアの術数研究への展開が望めるようになり、本書がこれからの術数研究に果たす役割は大きいと確信している。

最後に、本書刊行を快く引き受けてくれた勉強出版及び同社吉田祐輔氏に感謝したい。